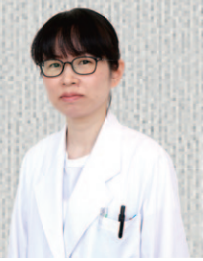
臨床検査科から説明！

インフルエンザの検査について



臨床検査科 細菌検査室
木永 芙美（きなが ふみ）

インフルエンザの検査には、免疫学的な原理（抗原抗体反応）を利用した迅速検査キットを使用し、10～15分程度でインフルエンザA、B型の検査ができます。多くの施設がこの方法を用いて検査されており、当院でも入院、外来を問わず24時間対応で検査しています。

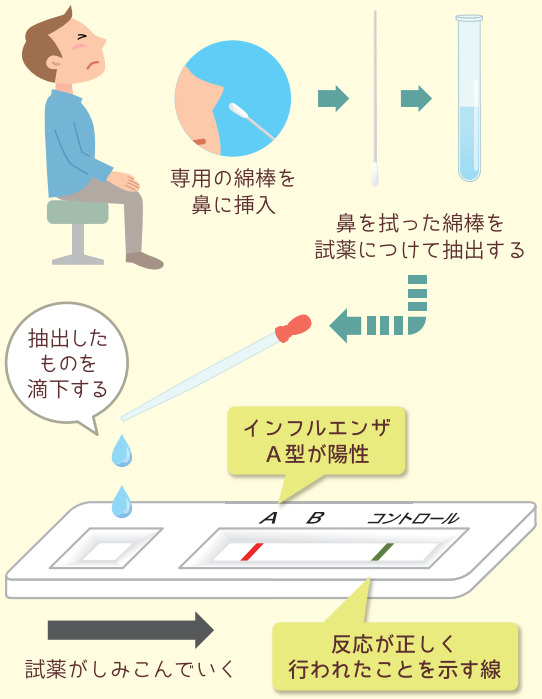
検査材料として鼻水や鼻の分泌物、喉の分泌物を用いますが、鼻水や鼻の分泌物の方が喉の分泌物より検出感度が優れているとされています。

検体の採取は専用の綿棒を鼻に挿入し、鼻の奥を拭って粘膜表皮や分泌物を採取します。それを試薬に抽出したものを検査キットに滴下します。検体中にインフルエンザA、B型のウイルスが存在すれば検査キットに線が出てきます。

インフルエンザウイルスの量が少ないと検査キットが陽性を示さないことがあります。インフルエンザに感染後、ウイルスが体内で増殖するまでには時間がかかります。そのため、感染して間もない時期に検査をしても陽性を示さないことがあります。また、発症から時間が経ちすぎた場合もウイルスの量が減少し始めているため、正確な結果が出ないことがあります。検体の採取方法が悪く、十分に検体が採取できていない場合も正確な結果は得られないため、確実に検体を採取することが大切です。

鼻の奥まで綿棒を挿入するため、多少痛みを生じますが、なるべくリラックスして顔を動かさないようにしましょう。

迅速検査キットを使った インフルエンザ検査のながれ



熊本医療センターのミニ医療情報誌

くす通信

第225号
2019年11月1日

国立病院機構熊本医療センター 発行

感染症内科より

インフルエンザの基本と対処法Q&A

臨床検査科より

インフルエンザの検査について

11月

「くす（樟）」の由来について

くす（樟）は常緑の広葉樹で、熊本城内に多く見られます。種々の精油成分を含み、良い香りがします。樟脳をはじめ色々な薬用成分が抽出されるなど有用な薬用樹でもあります。

また、くすし（薬師）とは、医師のことを指し、くすしぶみ（薬師書）は医術に関する書物のことを言います。

本誌はこの「くす」にあやかり、健康な生活を送るために情報を提供しております。お気軽にお読み下さい。

インフルエンザの基本と対処法 Q&A

国立病院機構熊本医療センター
感染症内科 部長
小野（おの） 宏（ひろし）

インフルエンザウイルスの多様性とは？

ウイルスの表面にはヘマグルチニン(HA)やノイラミニダーゼ（NA）といった多数の突起があります。特にA型インフルエンザウイルスには亜型という小さな分類があり、HA（18種類）とNA（９種類）との組み合わせで決まり、次々変化していきます。（B型は２種類あり、実はC型も存在します！）

インフルエンザの症状と、特に気を付けるべき事とは？

38℃を超える高熱と関節痛や筋肉痛、倦怠感が有名ですが、消化器症状や肺炎など深刻な呼吸器系の合併症、急性脳症なども起こします。かぜに比べて急激に発症し、かつ強烈であることが特徴です。ハイリスクグループと呼ばれる65歳以上の高齢者、５歳未満の小児、妊婦、肥満の方、呼吸器・循環器・腎臓疾患や糖尿病、免疫不全（免疫抑制剤を服用中など）の方は特に重症化に注意が必要です。

ワクチンを接種すれば大丈夫？

その年の夏頃までに冬に流行るインフルエンザの型を予測してワクチンが作製されますが、残念ながらこの予測は外れることもあります。また、通常ワクチンを接種すると２週間後くらいから抗体が増え始めます。その後１か月でピークとなり、３か月以降に低下し始めます。ワクチン自体や接種後の期間、皆様のお体の状況などにより、たとえ接種をしてもインフルエンザに感染することがあります。

日常生活における対処方法とは？

患者さまの咳やくしゃみによる“飛沫”や、これらとの接触により皆様の体内にウイルスが入ることで感染します。これを防ぐためには普段の健康管理、充分な栄養と睡眠、人の多いところの回避、帰宅後の手洗い徹底などを心がけましょう。（手洗い後のアルコールを含んだ手指消毒剤も有効です！）

もし感染してしまったら？

できる限り早めに医療機関を受診しましょう。キットを用いて短時間で感染していないかを判定できます。しかし、発熱早期（発症12時間以内）などウイルスの量が少ない時期の検査や、検体がうまくとれない場合は判定が難しいことがあります。お薬は必ず用法・用量・期間を守って服用しましょう。ご自宅では咳・くしゃみをする際にティッシュやハンカチで鼻と口を覆う咳エチケットや隔離を行うなど、他のご家族にうつさない工夫が肝要です。なお、療養期間は学童であれば学校保健安全法で決められていますが、成人の場合は特に決まりはありません。目安として発症後５日、かつ解熱後２日までは外出・出勤を自粛し、通常発症後３日から７日まで周りの方々に感染させる可能性がありますのでマスクを使用するなどしてください。症状の継続や新たな症状の出現がありましたら、まずは主治医（あるいはおかかりの医療機関）に電話で連絡し、対処方法や受診の是非などを確認しましょう。

感染症内科の紹介

2017年１月に感染症科（2019年４月からは感染症内科に改名）としてご入院中の患者さまのコンサルテーション科として産声を上げ、院内感染対策業務や抗菌薬適正使用支援チームの立ち上げ・推進や地域医療施設との院内感染対策領域での連携等に努めてまいりました。院内の各診療科や院外感染症専門施設と連携し、呼吸器感染症を中心として、全診療科の各種感染症や重症感染症の診療等を積極的に行っています。また、WHOで天然痘撲滅宣言を行った蟻田功名誉院長の時代より続く国際医療協力活動を国際協力機構（JICA）と共に推進しています。こうした多岐にわたる業務を継続し、皆様の明日の健康と安全に貢献できればと考えています。

国立病院機構熊本医療センター

- 診察日　月曜日～金曜日
- 休診日　土・日曜日及び祝日
  年末年始（12月29日～翌年1月3日）
- 受付時間　8：15～11：00

〒860-0008 熊本市中央区二の丸1-5
TEL　096（353）6501（代表）
FAX　096（325）2519
HP　https://kumamoto.hosp.go.jp/

※ 形成外科の受付は、水曜日以外の 13：30～ 16：30 となります。
※ 一部の科では、午後に予約診療を行っていますが、新患、予約のない方の午後診療は行っておりません。急患はいつでも受診できます。